

展示最終日。室内に置かれたベッドの周りに座り込む。一人は布団に包まったり、また一人はベッドに寄りかかったり。誰かの部屋に言った時にそうするように。



今回の展示のテーマ「上京」について

乙重：テーマは大きいくりでいうと「上京」という一言にまとめられます。みんながこの東京という場所に何かしらの目的を持って、あるいは持たないかもしれないけれど集まってきて。その集まってきたということ自体がすごいんじゃないかと思っていて。ここの場所にみんなが集まってきて一年以上が経ったというこの時期というのは、この場所にやってきて変化しつつある状態であり、過去、前の場所にいた時のことを改めて考えられるような位置にいると思う。上京する前と後の自分の中間地点にあるような。これからこの場で生活していくにつれて前の感覚もどんどん忘れていくかもしれないし、どんどんこの場に慣れてしまって別の人間になっていってしまう、しまうというかいくんだけど。振り返るのにしてもこれから変化していくにしても、今しか表現できないことがあると思って。

R：それぞれの時期とか旬というものに価値はあるよね。そういうものをこれから失わざるを得ないことは今から分かっているからこそ、やっぱり勿体無いから、それをカプセルとして一つの結果として残していければいいよね。今回はそのカプセルが展示という形態だったわけだけれど。そういう意味で展示を一つの契機や区切りとしてやっていきたい、という感覚は私もわかる。次のステップに進むためにというか。上京という状況が残っているうちに展示をやりたかったってことだね。上京という状況笑。

乙：笑。その、ちょっと差別的な言い方になるかもしれないけれど、もともとここ（東京）にいた人が表現するものと、私たち地方出身者が表現するものはちょっと違うんじゃないかな、と思っていて。私たちしか知り得ない感覚とか、それこそこの上京、という今の私たちの感覚を通してしかわからないものがあるんじゃないかなと思って。それを一度契表現しておきたかったというのものもあるかな。

R：例えば私は東京出身だから上京する、という機会は持たなかったしこれからも持てないんだよね。ただ、私とその乙重さんのような「上京する」という感覚を持つとしてそれは海外になるんだろうな。私はその東京人側なわけだけど、上京してきた人に対する何かしらの思いはあんまりないわけ。いってしまえば特にこだわりがないというか。でもやっぱり乙重さんが何かしらの感情なりを東京人側に持っているということは、何かしらのコンプレックスなり羨望なりというのがあったり、逆に何か優越感のようなものもあるんだと思うからそもそもこの企画を思いついたと思うんだけど、そういうところはどうですか？

乙：もちろんあると思う。優越感もコンプレックスも。私たち3人の中でよく地元の話とか、東京はこうだねっていう、あるある的な話だったりとか、偏見を含む話ではあるけれど。そういうのを話すこと自体が、まあダサいではないけれど田舎者感があるけど。

R：東京の人はわざわざ話すことないからね、そこら辺の話。もちろん話している人もいると思うし、東京出身であることに逆にコンプレックスを持っていたりする場合もあるにはあるんだけど、それはちょっと特殊なんじゃないかな。そしてその段階を飛ばしているからこそ先に進めている部分もあると思うし、逆に飛び越えているからこそそのあるフィルター的なものを通さないで世界を見るわけだから、世界の見え方は違うんだろうなって。もしかしたら足りない見方なのかもしれないし。

乙：それを一回こういう場で表現するというのが、改めてそういうことを考える機会だとか、乗り越える、乗り越える必要があるのかはまだわからないけれど、機会になるんだろうし。それがこの展示をやる必要性だと思う。

R：もしかしたらこの展示を終えることによって、違うアプローチの仕方で自分の地元っていうことを考えるきっかけになるのかもしれない。

乙：自分の生まれた土地だとか郷土性だとかそういう故郷に想いを馳せる感覚じゃないけど、そういう感覚を大事にすることはすごく大切なことだと思う。東京だから、とか広島だからとか、という境界を引いてしまっていることは、すごく後進的なんじゃないかと思うこともあるわけだけど。

R：生まれた土地という問題については一生ついて回る問題なんだろうね。私の場合それは「日本人」というアイデンティティの問題になるんだろうな。

乙：生まれた場所。それは多分「境界線」。「地方出身である」ことを肯定的に受け入れる部分と、やっぱり東京というところと線を引いてしまう、というのがいま頭の中でぐちゃぐちゃになっているところがあって。それは私個人のアイデンティティと言えることでもあるのかなって。地元にいる時と、大学に入ってから。大学に入ってからそういう色が強くなったんだけど。その私個人というの和其他の人のアイデンティティが混ざり合ったり、自分自身が何であるか、とか、私はこういう人間だ、とかそれをどこまで主張するのかとか。どこまでが自分なのかわからなくなる感覚みたいなのを味わう瞬間があって。私としては、そういう問題ってそれこそどこで生まれたのかとかとも共通するところがあると思っていて。ぐちゃぐちゃになる感覚。私が私自身である境界線がどこまでなのかっていう。

R：そういうのって色々なカテゴリー毎にあるよね。今回はそれが、自分の生まれ故郷と東京ってということだったと。

「部屋」



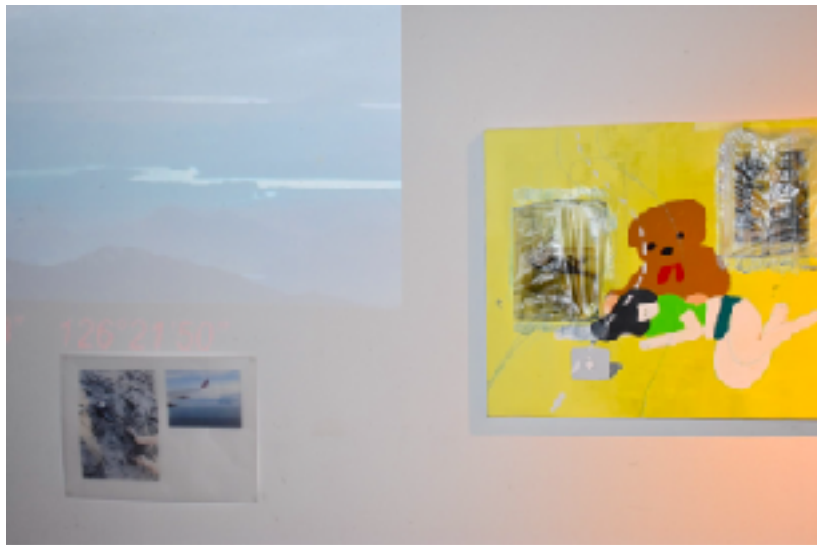
西尾：部屋ってイコール自分の家じゃないですか、一人暮らしって。だから、部屋って言っちゃうけどまあ家みたいなものを見てもらうことによって、もっと自分のことを知ってもらえるし。

乙：上京ということから派生して、みんな一人暮らしを始めたわけで。個人個人実家にいたときも自分の部屋というのはあったと思うんだけど、一人暮らしの部屋っていうのはそれよりも自分の色が強く出る。そういう場の方が、自分たちの作品を発表する場としてもっと人に楽しんでもらえると思った。くつろいでもらえる。少なくとも今の時点で私は、展示の場ってのは自分たちの色やアイデンティティを出す場だと考えている。だから上京というテーマに沿って、自分たちの個性を出す手段が、一人暮らしの部屋みたいにする、ということだった。

R：上京＝一人暮らし、という関係性強いもんね。

乙重杏歌「Border/境界」

乙：「Border/境界」をテーマにした一連の作品に映像を投影している。コンセプトとしてはいろんな記憶とか感情とか空間性っていうのが曖昧になって交わりあっていく。この全体の展示で個人的に考えている「変化する途中にある。今しか表現できないもの」という境界線というイメージもあるし、私が生まれた場所、今まで18年間生きてきた場所とこれから生きていく場所の境界線を探っている。地元での、生まれた場所での記憶と、こっちにきてからの記憶、というのを表現したくて。こっちにきてから、大学生になったからとか年齢を重ねて考えることが変わったとか、というのももちろんあると思うんだけど、やはり東京に来てから考え方も変わったし、感じることも気持ち的にもすごく変化したと思っています。それがなんでなんだろうとか、そういうことを考えていく中で、そこでもやっぱり生まれたところを意識している自分がいて。



R：それまで周りが否応なく与えてくれていた場所っていうものから全部解き放たれて自分一人しか今ないっていうところに、東京っていう地にポツーンって来たときに初めて自覚できた感覚っていう。

乙：浮遊している感覚があって。何かをつかめているのかもわからない。確かなものがない。それは大学生っていう立場だから感じることなのかもしれないけど。

R：自分が一人の人間で、独立しているっていうことを自覚した機会だと思うんだよね。それがインスピレーションになっているのかって。

乙：自分しかないから。頼れるものが。浮遊しているとか、止まらない、という感覚が、東京っていう場所とあっている気がして。その境界線、ボーダー、というのが、私の頭の中では繋がった。浮遊している感覚。止まらない感覚。境界線。このワードを、表現したかった。

R：その浮遊している感覚っていうのに、今の時点でのある終止符というか、釘を壁に打つ、というか。ラインを引きたかったというか。多分その引いたラインの上に乗かって、そこからまたスタートしているという欲求が今回のインスピレーションに繋がったと。

西尾なを「わんぴーす」

西：上京しての思いみたいなものが来てくれた人に伝わればなあと。

R：具体的にいうと？

西：上京して大学生になってやることは毎朝、服を着ることで。服を選ぶことが毎朝の始まりなんですけど、人によって服の選び方は違うと思う。適当に選ぶ人もいるかもしれないし、今日は何かがあるからこれを着ようって思ってるかもしれないし。それで私が服を選ぶときは、その日頑張れる、自分が戦える服を選ぶ。だから絶対適当に服を選ばない。今日はこれを乗り越えるためにこの服を着よう、みたいな。



R：乗り越えることが毎日あるの？笑

西：ありますあります！毎日戦いですよ私は！学校行くのも戦いだし！戦ってるつもりはないけど気持ち的には。

R：あまああでも、テンション上げるために服を着ることはある。

西：そうそう、それが私は毎日だから。

R：私は基本、ああ今日は絵の具を使う日だから綺麗な服は着ない、って決めてる笑。それで毎日汚い服笑。

西：そういうのもありますよ笑。辛いって思ってる訳じゃないけど、その日乗り越えたい、いい日にしたいっていう思いが毎日あるから。だから私の1日の始まりは服選びなんです。それで服作りたいなあって考えてて。それにやっぱり一人暮らしを始めてから、服を洗って干して畳んでっていうのを全部一人でやらなきゃいけないってのもっと服と関わる機会が多くなる。それに東京には服の選択肢が本当にたくさんあって。こっちとは比べ物にならないくらい。で、昔着なかった服も着るようになったり、新しい趣味もできたけど、それでもいつもより辛い時、さらに頑張らなきゃいけない時、不安な時、そういう日はいつもワンピースを着る。気づいたらいつも買っているし、手元にないと落ち着かない。あれ何でだろう？何でそんなに好きなんだろうって考えたんですよ。無意識だったんだけど。そしたら小さい頃に毎日「わたしのワンピース」っていう絵本を毎日、本当に毎日読んでいたのを思い出して。昔からワンピースが身近だったんだって。包まれている感じがすごいのかな。それで今もそれは続いているんだって。東京に来て違うファッションに触れたりいろんなものに触れてさらにわかったこと。今壁にかけているのも、家でもかけているからなんです。見てたいから。だからこれはわたしの部屋と同じ。

一木麻由「喪服」

一木：どうしても上京したくて。中学生の時はロリータファッションをよく着ていたりして、高校になったらまた別の好きな服があって。それらは全部どこも東京にあるものだった。だからお小遣いやお年玉をもらったら全部原宿に行くための資金にあてていて。好きなことしながら東京に行きたいって思っていた。服飾やテキスタイルに近いことを小さい頃からさせてもらっていたこともあったし、本当は服飾の専門学校に行きたかった。でもやりたいことが専攻できなくて、もっと別の方法で表現できるんだろうなって思ってたんですけど。大学に入ってから、自分が好きだったものやかわいいと思ってたものを逆に失ってしまって。どこかでストッパーがかかったのかな。大学の空気感に合わせなきゃっていうのが意識的にあって。大学行きたくないなって落ち込んでしまっていて。明るくなれるような状況だと思っていたのにそうじゃなくて。このかわいいものへのキラキラした気持ちとかもどんどんなくなってっちゃうのかなとか、上京して他のものを見るようになって変わって行っちゃうのは悲しいな、って。だからそういう気持ちで今回は喪服を作りました。



R：喪服かあ。

一：そう。でも今回の展示や、最近やっと評価を気にせずに自分の好きなことを評価を気にせずにやるべきで、それが価値だなんて思うようになって。今まで評価とかを気にしていたので好きなものに素直になれなかったりだとかしてたんですけど、このギャラリーでグループ展をやるって決まった時に、自分のやっていたいこと、結果ではなくやりたいと思ったことをやってみようっていうチャレンジを今回してみている。それがいい方向に進めたなって思ってます。すごく楽しくて。

R：それ最高。楽しくないとね。

一：今まで美術に対して結構辛いなあって思ってたんですけど。今回それが一切なかったなあって。制作期間中とかも楽しかった。それがもっと広まっていけばいいなあって。そういうきっかけになったらいいなあって思いました。

R：最終的に楽しくないとこんなことやってらんないからね笑。だから今回喪服をつくってるわけだけど、その結果としてポジティブになれたというある種逆説が生まれててちょっと面白いんだけど。上京ていうのは、一木さんにとっては何かしらもっとキラキラしたものっていうイメージで、今は何かしらの変化はありましたか？

一：何でもできる場所だろうなって思っていて。東京に出たからこそ、こうしてギャラリーに出したりもできているわけだし。今まで遠くて見れなかったものも見る機会もあって。すごいいいなって思う。そのぶん何かなくなっちゃったなっていうものもあるけど。

地方出身として東京とは

R：他の地方出身の人の間にも、やっぱり地方出身で上京して来た、ということで何かしらの感慨を持っている人とかって多いの？わたしは東京出身の人間なんだけど、その立場から言うと地方出身の人をそこまで意識することはないと思うんだよね。地方出身者と東京出身者の間にあるギャップとかは意識をしやすいのかな。

西：違う。思う。それに、出て来た人も思うかもしれないけど、地方で生まれて地方で育って地方の大学に行ってる子が考える東京っていうのが、きた時にみた東京とあまりにも違う。東京は旅行するところであって住むところじゃないっている。

R：まあ、住んでる人間が一番多いところなんだけどね笑。

西：そう、何を根拠に言ってるんだっていうって。でもわたしも来る前はちょっとそんなイメージあったな、、笑。

3日間住んでみて

西：こういう場所だとちょっと長居してくれるし。いつも喋らないことも話したり、長くいろんな話ができまし。ずっといるから、作品をずっと見るわけで。その雰囲気は普通のギャラリーよりも味わってもらえたのかなと。

乙：私たちがあまり話したことないこと交流できるっていうのももちろんだし、来てくれた人同士が今まで話したことなかった人同士も交流できるっていう。座ってくつろいだりトランプしたりご飯も一緒に食べて。そういう交流の仕方ができて、より深いものになったんじゃないかなって。そういう場になれたのはよかったと思う。

一：話す時間が長くて。馬鹿話だけじゃなくて深く考える話も多かったから、改めて向き合えたなっていうのはありました。

乙：本当に家に来てもらった感覚。それが再現できたのはすごいよかったと思うし、いろんな問題はあるにせよこの展示の核となる部分が実現できたという実感はある。そういう意味では、当初の目的を果たせたのではと思っています。



Profile

左から

乙重 杏歌（1998年生） 出身：広島

西尾なを 出身：長崎

一木麻由（1998年生） 出身：山梨

全員武蔵野美術大学芸術文化学科学部2年所属



”生きる” ということの演技性について

Rikako

”演じないで生きている” と自信を持って言える人は一体どれほどいるのだろうか。

いや、きっとほとんどの人がその問いに対してイエスと答えるのかもしれない。 「当たり前でしょう。わたしはわたしの服をきてわたしの家に住んでわたしの仕事をしている」と。

ほんとうに？

わたしは常に「わたし」を演じ、あなたは常に「あなた」を演じているのではない とほんとうに言えるのだろうか。

わたしにつけられた名前の、わたしがこういう人間だろうと周囲に思われているように演じている。そして格好いい人がいるとその人を演じて見たりもする。社会で生きるということは演じるということなのではないか。

ギャラリーで生活してみる。

それは本当の生活なのか、それともパフォーマンス、演技になるのだろうか。

パフォーマンスというくくりになるとして、ではそこで暮らす3日間は彼女たちにとってパフォーマンスというフィクションになってしまうのだろうか。

上京してきた3人が3日間ギャラリーで暮らす。生活空間へのアートの持ち込みというのが課題である日本の現状への問題提起として捉えてみても面白い。「壁などにアート作品を提示しているところで生活する」というパフォーマンスを、「生活空間ではない」ギャラリー、「一般の人々が敬遠しがちな、アートのための場所である」ギャラリーで行う。生活空間にアート作品を置く、ということと真逆の方向から同じテーマについて扱っているようで興味深い。しかしその生活空間にアートを展示する、という試み以上に、その行為自体を問題提起として鍵括弧でくくるために、あえてギャラリーという空間で行っている。ギャラリーの扉を開けて芳名帳とペンと机があって、といういつも通りの手順を想定しているとそれは裏切られる。中に入ればもちろん空間は白いのだが、スペースの真ん中にはくつろいだ様子の展示者自身たちがたむろしておしゃべりをしている。訪問した者はそこに招き入れられ、まるで友人宅に招かれたような状況に陥る。靴を脱いでもいいかもしれない。そう、そこでは展示者たち自身も作品であり、インスタレーションの一部である。その上そこにおいて鑑賞者は、展示者達と関わり、喋り、くつろぎ、空間に自らを配置せざるを得ない状況に追い込まれる。その時果たして鑑賞者にとって、そして展示者にとっても、そのパフォーマンスの場は果たしてフィクションのままにとどまっているのだろうか。

パフォーマンスがパフォーマンスだとどうして言えるのか。

生きることがパフォーマンスではないとどうして言えるのか。

生きているあなたは、ほんとうにあなた自身なんだろうか。

生活というものとその演技性の境界が曖昧になる感覚に襲われるのは私だけだろうか。

企画者自身にこのような意図や解釈があったわけではないのかもしれない。

しかしそういう意味で見えてみると、また面白い試みであったのではないかと思う。